

見つめるまなざしの先に

聖心女子学院高等科2年 石黒 小百合

私は現在高校二年生で、進路の選択という意味で人生の大きな岐路に立たされている。その中で人生の先輩である先生方からお話を伺いたいと思い、今年の四月にカメラサークルを立ち上げ、先生方へのインタビュー動画を制作するプロジェクトを企画した。私の通う学校は校則が厳しく、このような前例のない取り組みには許可が下りないかもしれないと懸念していたが、先生方のご理解とご尽力によって実現に至った。そして五月から、サークル員の同級生と共に本格的に撮影を始めることとなった。

私たちは真剣なものから少し砕けたものまで幅広い質問を用意したが、特に「なぜ教師という職業を選んだのか」、そして「教師の仕事の魅力とは何か」という二つの問いに力を入れた。この二つこそ、将来の進路に迷う生徒たちが多角的に選択肢を考える際の大きなヒントになると考えたからだ。そのため、この作文コンクールのテーマを知ったとき私たちの取り組みと重なっていることに驚くとともに、先生方のお話を広く共有する絶好の機会だと感じた。

まず「なぜ教師を選んだのか」という問いに対して、先生方はそれぞれ異なる答えをくださった。恩師から受けた影響の大きさを語る先生もいれば、「教える」という行為そのものへの憧れを口にする先生もいた。しかし共通していたのは、「教師という仕事に大きな魅力を感じた」という点である。その答えを受け、私は「教師の仕事の魅力とは何か」について考えた。

私の考える教師の仕事の魅力は「生徒の成長に深く関わり、人生に影響を与えられること」だ。実際に、小学校六年生の時の担任の先生は私の価値観や生き方に大きな影響を与え、先生が示してくれた在り方が今の私の指針となっている。この経験から、教師とは単に知識を伝えるだけではなく生徒の人格や人生にまで関わる存在であり、非常に繊細な職業なのだと思うようになった。

よって、その繊細さゆえの難しさもある。子どもは良い影響を受ければ大きく成長するが、時にはそれが歪んで伝わり、逆の効果を招くこともある。例えば、私が尊敬するその先生を、当時親しかった友人は過干渉で迷惑な教師だと思っていた。私から見れば素晴らしい先生でも、彼女にとっては受け入れがたい存在だったのかもしれない。このように、教師という仕事は一筋縄ではいかず、常に生徒一人ひとりの異なる受け取り方に左右される。しかし、私はそうした複雑さの中でも生徒の人生に寄り添えるところに教師の仕事の魅力があると考えていた。

予想に反して、先生方の答えは大きく異なるものだった。「生徒の成長に影響を与えられること」と答えた先生

は一人もいなかったのだ。代わりに多くの先生が語ったのは、「生徒の成長を間近で見られること」だった。未熟な子どもたちが少しずつ自分で考え、行動し、大人になっていく姿を隣で見守る。その変化の瞬間に立ち会えることこそが、教師の最大の魅力だというのである。

そこで初めて、私は先生方と自分の考えの違いを理解した。「成長に深く関わり影響を与える」というのは教師が主体となって生徒を導くという視点である。それに対し「成長を間近で見られる」というのはあくまで、生徒が主体的に変わっていく姿を教師が受け止め、ともに喜ぶという視点なのだ。前者は教師が「変える側」となるが、後者は教師自身も「変えられる側」に立つ。私はその違いを意識せず、同じ意味だと考えていたが、実際には「誰が主体なのか」という大きな差があることに気がついた。

私はその気づきに深い感銘を受けた。教師は生徒を変える存在だとばかり思っていたが、実際の先生方は自分たちのことを生徒に変えられる存在であると思っているのだ。生徒が壁を乗り越えていく姿に励まされ、共に成長していく。その関係の中に教師という仕事の真の魅力がある。

この発見は進路を考えるうえでも大きな学びをもたらした。職業とは一方的に成果を出すものではなく、相手との関わりの中で意味を持つものであると分かったからだ。教師だけでなくどんな職業でも、誰かと関わることで自分自身も成長し、その関係性の中で仕事に魅力を見いだしていくのだろう。

インタビューを通して私は、「教師の魅力とは何か」という問いに一つの答えを得た。それは「生徒の成長を間近で見られること」であり、同時に「その成長から自分も学び、成長できること」なのだ。この気づきは教師という職業の見方を大きく変えただけでなく、私自身が今後進路を考えていく上での視野も広げてくれた。この理解が、未来を模索する今の私たちに、新しい道を見つけ出す力を与えてくれると信じている。